春期京都福音特別集会（3）（於大和屋旅館）
主の使
――使徒行伝第12章――

（「活けるキリスト」142号、143号のための原稿より）
１９７７年５月１日
小池辰雄

聖名による三人組　聖霊の祈り　エホバの熱心　棄身の友情　逆プラス　主の使　霊子力南無
キリスト　御名のゆえに　変質変貌　本願の力　「主の使」となる　この身が聖書一巻となる
一日千年　終末的実存　献身　天地一如

【使徒12】

1その頃ヘロデ王、教会のうちの或人どもを苦しめんとて手を下し、2剣をもてヨハネの兄弟ヤコブを殺せり。3この事ユダヤ人の心に適いたるを見て、またペテロをも捕う、頃は除酵祭の時なりき。4すでに執りて獄に入れ、過越の後に民のまえに曳き出さんとの心構えにて、四人一組なる四組の兵卒に付してこれを守らせたり。5かくてペテロは獄のなかに囚われ、教会は熱心に彼のために神に祈りをなせり。6ヘロデこれを曳き出さんとする前の夜、ペテロは二つの鎖につながれ、二人の兵卒の間に眠り、番兵らは門口にいて獄を守りたるに、7視よ、主の使ペテロの傍らに立ちて、光明室内に輝く。御使かれの脇をたたき、覚していう。『疾く起きよ』かくて鎖その手より落ちたり』8御使いう、『帯をしめ、鞋をはけ』彼その如くしたれば、又いう、『上衣をまといて我に従え』9ペテロ出でて随いしが、御使のする事の真なるを知らず、幻影を見るならんと思う。10かくて第一・第二の警固を過ぎて町に入るところの鉄の門に到れば、門おのずから彼等のために開け、相共にいでて一つの街を過ぎしとき、直ちに御使はなれたり。11ペテロ我に反りて言う、『われ今まことに知る、主その使を遣わして、ヘロデの手およびユダヤの民の凡て思い設けし事より、我を救い出し給いしを』12斯く悟りてマルコと称うるヨハネの母マリヤの家に往きしが、其処には数多のもの集りて祈りいたり。13ペテロ門の戸を叩きたれば、ロダという婢女さきに出できたり、14ペテロの声なるを知りて、歓喜のあまり門を開けずして走り入り、ペテロの門の前に立てることを告げたれば、15彼ら『汝は気狂えり』と言う。然れどロダはそれなりと言い張る。かれら言う『それはペテロの御使ならん』16然るにペテ

ロなお叩きてやまざれば、かれら門を開き之を見て驚けり。17かれ手をうごかして人々を鎮め、主の己を獄より導きいだし給いしことをつぶさに語り『これをヤコブと兄弟たちとに告げよ』と言いて他の処に出で往けり。18夜明になりて、ペテロは如何にせしとて兵卒の中の騒ぎひとかたならず。19ヘロデこれを求むれども見出さず、遂に守卒をただして死罪を命じ、而してユダヤよりカイザリヤに下りて留まれり。

20さて、ヘロデ、ツロとシドンの人々を甚く怒りたれば、其の民ども心を一つにして彼の許にいたり、王の内侍の臣ブラストに取り入りて和諧を求む。かれらの地方は王の国より食品を得るに因りてなり。21ヘロデ定めたる日に及びて王の服を著け高座に坐して言を宣べたれば、22集民よばわりて『これ神の声なり、人の声にあらず』と言う。23ヘロデ神に栄光を帰せぬに因りて、主の使たちどころに彼を撃ちたれば、虫に噛まれて息絶えたり。

24かくて主の御言いよいよ増々ひろまる。

25バルナバ、サウロはその職務を果たし、マルコと称うるヨハネを伴いてエルサレムより帰れり。

●聖名による三人組

今回は、使徒行伝12章です。ユダヤはローマの属国になっていましたが、

1その頃ヘロデ王、教会のうちの或人どもを苦しめんとて手を下し、

迫害の手がのぞんできたわけです。

2剣をもてヨハネの兄弟ヤコブを殺せり。

あの十二弟子の一人ですね。主の兄弟のヤコブではありません。

3この事ユダヤ人の心に適いたるを見て、またペテロをも捕う、

キリストの三弟子たるペテロ、ヤコブ、ヨハネのヤコブが殺され、こんどはペテロがつかまりました。

頃は除酵祭の時なりき。4すでに執りて獄に入れ、過越の後に民のまえに曳き出さんとの心構えにて、四人一組なる四組の兵卒に付してこれを守らせたり。

赤穂義士は三人一組の態勢で討入りをしました。皆さんもどうぞ、三人でも四人でもいいですから、互に助け合う友垣を作ることは大事なことです。

「二、三人我が名に在って集るところに我もまた在るなり」

ですから。これは何も隔てを作るのではない。友垣を作りながら大きな連なりとなって、枝々相連なってキリストの体を成すわけです。集会もそうですよ、何ごとにつけ互に責任をもって連絡し合い、また病んだときはいたわりに出かけ、具体的に行う。そういうことが、

みたまの愛の現実においては、規則ではなくして自ずから生命的に展開することが極めて大事です。

5 **かくてペテロは獄のなかに囚われ、教会は熱心に彼のために神に祈りをなせり。**

コイノニヤの強いエクレシヤでしたから、彼のために熱心に執り成しの祈りをしていた。こういう隠れた執り成しの祈り、これはお互に知らないのですけれども、必ず相手を守っている。ぜひともやってください。実に祈りくらい本当に現実なものはない。

●聖霊の祈り

福音を受けて私が最初に書いたのは「祈りの哲学」という文章だった。

「どうしても、祈りというものが人間の本質の根底にあるはずだ。生命の本質の根底は祈りだ」

という内容のもので、今、読み返してみて驚いている。それが私の狙いだった。無教会時代には、祈祷会がなかったので、私の中でくすぶっているだけでしたが、阿蘇の山奥で手島さんと一緒に集会をしたときに、とうとう火がついた。祈りほど力強いもの、現実なものはない。キリストは何よりも祈りの人であった。神の中にいつも自分を投げ入れ、そこにどっかりと坐っている人だった。我々はすべっても、ころんでも、倒れても、そこで、

「主さま！」

と叫ぶところが祈りの現実です。人を呼ぶのではない。主を呼ぶ。これが即ち、彼ら（使徒行伝12章5節のエクレシヤ）がいかに祈りの現実をもっていたかということを知ります。実にキリスト教の歴史は祈りをもって始まっている。それは、祈りを与えるものが来たからです。祈りを与えるもの、これは聖霊なのです。聖霊は祈りの霊素であり、霊泉です。まず暗中模索の祈りがあるでしょう。しかし、聖霊が来ると本当の祈りとなる。パウロが、

「心をもって祈り、霊をもって祈れ」

というとき、この

「霊をもって祈る」

ということが、聖霊が来なければできない。霊をもって祈るという、

「霊の祈りをせよ」

ということは、私は無教会時代にはなかった。心の祈りはある。

「小池さんの祈りはいい祈りだ」

なんて他人が言ってくれた。それはしかし、心の祈りの限界内でした。まだ本当の霊の祈りではない。

●エホバの熱心

この聖書（使徒行伝）にいう「熱心に祈っていた」ということは、これを人間的熱心ととり違えてはいけない。

「ヤーヴェーの妬(ねた)み」

という言葉があるが、あの「妬み」とは、神の愛する魂をサタンが奪っては大変だから、エホバの神様は魂を熱愛された。それを「妬みの神」と表現しているわけです。いわゆる妬みでは勿論ない。「エホバの熱心」とはこういうことであって、聖霊の熱をもって召団（エクレシヤ）はペテロのために祈っていた。聖霊の熱、霊熱だね。こちら側の熱心は、ある程度あっても悪くはないが疲れてしまう。神の熱心、霊熱に切り換わらないとね。

「エホバの熱心これを成す」

とイザヤ書にある通り。

「汝の熱心いずこに行きしや」

と第三イザヤが神様に訴えている。エレミヤも、

「汝立ち帰り給え」

貴神(あなた)が帰って来てくださいと。こっちが立ち帰るのではなくて、

「貴神が帰って来てください、そうしたら私も帰れます」

などと言っている。エレミヤは実に図太い祈りをしている。ということは、

「自分から帰ろうと思っても帰れない。私はダメだ、尻餅つきました。しかし、貴神(あなた)が帰って来てくだされば立ち上れます」

と。小さな子供が「ワア～ン、ワア～ン」泣いていて帰れないと、お母さんの方から子供の方へやってくるわけです。

●棄身の友情

みたまの集団は聖霊の熱心で彼（ペテロ）のために神に祈りをなしていた。

6 **ヘロデこれを曳(ひ)き出(いだ)さんとする前の夜、**

ヘロデはいよいよペテロを処刑せんと、殺そうとした。

第二次大戦のとき、こういう話を聞いた。南方戦線にあったある部隊長のこと。

「お前は部下に命じて捕虜を殺したろう」

ということで死刑の宣告を受けた。ところがこの部隊長のその上の上官が、

「私の部下達は何も悪いことをしたのではない。私がやった。あの捕えられた将校（部隊長）は決して悪いのではない」

と、自分が刑場に引き出され、今や刑場の露と消えんとするその寸前にはっきりと遺言して死んだそうです。

獄は部屋が幾つもあって個室になっている。一人ずつ順次刑場に曳き出されてゆく。隣

室の人が出て行って断頭台にのぼった。明日は自分の番だ、と思っていた。獄吏がやってきた、靴音が近づく。独房の前で止った。錠が外される。曳き出された。ところが、

「お前は宥された」

と。うそかまことか、夢か現か！　それはまこと、それは現であった！　それは先の上官が全責任を負ったからだった。

「自分の今日あるのは、あの上官の友情によったのだ」

と、私に話しました。

そのように私たちは神の前に立てない滅びの人間ですけれども、即ち、

「罪の価は死なり」

であるけれども、しかし、キリストは私たちのために、

「神様、彼らの罪を見ないでください。私を見てください」

と、十字架上のキリストは叫んでいてくださる。それで私たちは罪を宥され、忘れ去られた。いやそればかりではなく、

「今度はお前たちに本当の生命をやるぞ」

とキリストに迫られている。この生命をいただかないでどうするか。このいただいた生命は、私たちは余生をいただいている。この余生を神様のために、主にあって生きないで、どうして生きることができますか。人生の意義とか何とかいうことではない。

●逆プラス

与えられたる新しき生命、神の栄光の現われざるを得ないところの生命！　もうそうなったら、

「何も要らん」

ということになる。いろいろな肉体的欠陥を持っていても、そのマイナスを逆プラスにしてしまう。逆比例の存在と申しましょうか、普通の健康者よりももっとものすごいエネルギーをもつ。神の愛の力は、キリストの義の生命は、

「千万人といえども我往かん」

の気概を与えてくださる。私のような弱虫の破れ器がどうしてこうなったのでしょうね。それは私じゃないから、みたまですから、有難くてしょうがない。皆さん一人ひとりが本当にそうなのです。相対的価値などクダクダいうことはない。恋愛であろうと、勉強であろうと、仕事であろうと、天来のエネルゲイア（エネルギー）でやりなさい。

ペテロは二つの鎖につながれ、二人の兵卒の間に眠り、番兵らは門口にいて
獄を守りたるに、7視よ、主の使ペテロの傍らに立ちて、光明室内に輝く。

私は今日、「主の使」と題しました。旧約から新約に至るまで、御使がいかに働きをなすか。キリスト降誕の時も然り。ガブリエルが現われた。ガブリエルとは、「神は頑張り」と

いう意味で、ヘブライ語の「ガーバル」とは「がんばる」という意で語呂が似ておもしろい。同じく天使のミカエルとは、

「誰か神の如くならんや」

という意味で、イスラエルの名前は神中心的な名前が多い。「イスラエル」は

「神勝ち給う、神戦い給う」

等の意。モーセに現われた神は、戦い給うた。紅海を渡らしめて、出エジプトを敢行せしめた。エジプトの戦車も騎馬も軍隊も、大浪に呑まれてしまった。

原子爆弾や水素爆弾などサタンの道具をたくさん造っている現代は、本当に危機的です。神の力は救う力です。サタンの力は滅ぼす力。人間は自らを滅ぼす力を造っている。人間の知恵が我欲と一緒になって、とんでもないものを造っている。世界の政治家が本当にイデオロギーを越えた人間となって握手しない限り、世界はいつどうなるかわからない。問題はみな結局、魂の問題に帰一する。

魂の問題の鍵を私たちは握っているではないか。この鍵を与えないでどうするか。貴方方は、本当の自信と誇りをもってください。どこに行ってもそこを天国にできるのですよ、本当に。主さまより、キリストよりほかに素晴らしい実在がありますか？　キリストより素晴らしい力をもった者がいますか？　キリストの愛、贖罪愛より素晴らしい愛がどこにありますか？　どう思われてもいいよ、いわゆる体裁の世界ではないから。

「我は剣を投ぜん為に来れり」

と主は言い給う。きびしい愛なのです。しかし、そこには本当の歓喜が湧く、本当の力が来る。

さて、この主の使がペテロの傍らに立つと、大変なことが起きた。

「光明室内に輝く」

と。「主の使」というけれども、これは簡単に言って、「主が」といっていい。主がただ使を通して現われ給うた。旧約ではよく、「主」だか「御使」だかわからないような言い方をしている。自在なのですから。天使は幼な児を守っている。

「幼児をいい加減に取り扱うな、天使が守っているぞ」

とマタイ伝にある。親の子に対する教育も、人間の魂は本当に神に顧みられている存在であるという自覚においてなさるべきです。

●霊子力

「主の使ペテロの傍らに立ちて、光明室内に輝く」

こういうところを読んだら、これを瞑想したら、もう祈りの世界に入ってしまう。

御使かれの脇をたたき、覚していう。『疾く起きよ』かくて鎖その手より落ちたり』

私たちの理解を超越した現実です。理解で分ることなんか大したことはない。原子力というけれども、これは霊子力です。この霊子力が働く。キリストの霊子力が働く。こういうものすごい現実はそう簡単には起きない。けれども、このものすごい現象の奥の現実を私たちは質的に受けとることができる。

運命、環境にはいろいろあります。悪い運命や悪い環境、不如意なことがいろいろある。結婚問題がうまくいかないとか、身体がどうもうまくないとか、就職がうまくいかないとか、いろんな鎖がある。しかしそれは、主の使、みたまを受けとることによって既にはずれている。鎖はあれどもなきが如し。

「私は牢に鎖に繋がれているけれども、神の言はつながれているのではない」

と、パウロが言っている。

「お前たちは活ける文字ではないか」

と。

「太初に言あり、言は神とともにあり、言は神なりき」

というけれど、私たち自身がキリストの言です。このキリストの言なる我、この自由を誰が束縛することができますか。いわゆる言論の自由などということを言っているのではない。「言論の自由」のために無責任な言葉が流れて公害現象となったりする。

牢中のペテロの鎖が落ちた。私も、いろんな不如意なことも全部、聖霊が来てみたら、落ちてしまった。問題がなくなってしまいました。問題中の問題は、ただキリストと一緒にあることだけ。先に立ち、また後から来、中に来てくださるところの自在なるイエスという「我」が無二の友です。

「イエスの名に勝る名はなし」

という。

「キリストにはかえられません」

という聖歌があるとおり。

8 **御使いう、『帯をしめ、鞋をはけ』彼その如くしたれば、又いう、『上衣をまといて我に従え』**

ペテロは驚天しました。まぁ、福音書のペテロと使徒行伝のペテロとかくも違うことか。これははっきり、聖霊の現実です。聖霊に捉えられたる人、みたまの人、霊人、霊止とペテロはなった。

●南無キリスト

「南無キリスト」とは、キリストの中に帰入する、祈入することです。人間というものは、観念では、思想ではどうにもならない。具体的なものです。「もの」は「物」ではない。最も具体的なものは、キリストという実在です。

緑の樹は素晴らしい。緑の樹は素晴らしいというけれども、太陽の光がその実力でしょ。聖霊の力は、我々の行為の源動力です。神の霊は一切のものを造った。神の言は一切のものを造った。神の霊言、霊力が生命をあらしめている。それが来れば、曙を呼ぶことになる。曙を喚び、夜のとばりをもたらし、星を点じる。

そういう心霊の力を喝破した人が日本にもいた。栄西禅師だ。

「偉大なる哉、心や」

という。天地万物を心が動かし、荷いまた造るようなことを言っている。あの「心」は単なる心ではない。全く如来的な霊の心だ。我々も使徒行伝の現実を質的な意味において私たちの現実に化体していかなかったら、つまらない。

「不思議な業が問題になっている」

なんて、そうじゃないですよ。不思議な業をして業たらしめているところの奥の世界に注目すべきなのです。

9 **ペテロ出でて随いしが、御使のする事の真なるを知らず、幻影を見るならんと思う。**

本当にあるがままに書いてある。ペテロは本当にそう思った。自分は目覚めているのか眠っているのか、何だか夢遊病者のように動いているみたいだ、と思ったんだろうね。だけど事実、鎖が解けてしまった。

10 **かくて第一・第二の警固を過ぎて町に入るところの鉄の門に到れば、門おのずから彼等のために開け、相共にいでて一つの街を過ぎしとき、直ちに御使はなれたり。**

「門おのずから彼等のために開け」

とは御使の力です。パウロのときにもあった。ピリピで捕えられて獄につながれたとき、パウロとシラスが祈っていた。霊震が起こって扉が開いた。ある霊的法則が働いている。神様の生ける真理の法則は悔るべからずです。そういう鉄の門もおのずから開いてしまった。

「相共にいでて一つの街を過ぎしとき、直ちに御使はなれたり」

もうこれでよろしいとなると御使はパッと離れる。

11 **ペテロ我に反りて言う、『われ今まことに知る、主その使を遣わして、ヘロデの手およびユダヤの民の凡て思い設けし事より、我を救い出し給いしを』**

●御名のゆえに

ペテロの存在はキリストに掴まれている存在で、使命のある限り彼は守られるけれども、

「最後には、思わざるところに連れて往かれる」

とキリストはその事まで預言された。ペテロの逆さ十字の殉教の死が預言されていた。預

言者も使徒達もみな十字架道を進んで行った。神の国の土台はそういう人達によって築かれている。だから彼らは滅びるどころではない。彼らはキリストのよみがえりの力にあずかって、天界にあってなお神の国を来たらせんと、先頭きって天界を進軍している。最後の瞬間のおとずれに向かって。

「今まことに知る」

これは全部、福音のゆえに、御名のゆえになされている。私たちは、

「御名のため」（目的）

と言いますけれども、力んで「御名のため」じゃない。

「御名のゆえ」（原因）

なのです。元は神様の方から、

「御名のゆえにお前をつかう」

と。また中心は、

「御名に在って」（現実）

である。それから初めて「御名のために」ということが言える。

私たちが賜わる恵みはみな、「御名のゆえ」の恵みであって、こちら側の何ものでもない。御名のゆえであるから、この恵みにおいて栄光が顕われるわけです。ですから、すること為すこと、これ全部おのずからなる讃美なのです。栄光自顕です。「讃美歌」とは、本当はすばらしい言葉なんだよ。「ハレルヤ」とは、

「汝らエホバを讃めたたえよ」

という意味ですから。

12 **斯く悟りてマルコと称うるヨハネの母マリヤの家に往きしが、**

これはマルコ伝を書いたマルコのことです。ヨハネス・マルコスという。そのお母さんは、マリヤというが、これはなかなか重だった婦人であったらしい。マリヤの家というのは「最後の晩餐」がもたれた家だろうと学者も想像しています。期せずして集ってくる。

其処（そこ）には数多（あまた）のもの集りて祈りいたり。

祈りは楽しくなるわけです。けれども、いわゆる

「祈り三昧でそれでおしまい」

というのではないですよ。我々は集会でキリストをいただくが、いただいたものが本当に身につくためには、毎日の生活において我々が鍛えられていかなければならない。御飯を食べてもそれを消化しなければならないのと同じことです。信仰（恵み）も消化して、人にエネルギーを与えていかなくては。与えていかなかったら、聖霊の世界はダメ、沈澱してしまう。

淀んでいたらダメです。「小池」ではダメ、「小泉」でないとね、「大泉」くらいの名前にしたいが、「小池辰雄」なんて一番悪い名前だね。名はともかく、天来の力にあずかりたい

から、私の号は「天鐘」だとか、「天晨」だとか「天韻」だとか「天極道」だとかいう。

14 **ペテロの声なるを知りて、歓喜（よろこび）のあまり門を開けずして走り入り、ペテロの門の前に立てることを告げたれば、** 15 **彼ら『汝は気狂えり』と言う。**

彼らは、「ペテロは獄中だ、へたするともう殺されてしまっているかも知れない」と思っていたから。

然れどロダはそれなりと言い張る。かれら言う『それはペテロの御使ならん』

16 **然るにペテロなお叩きてやまざれば、かれら門を開き之を見て驚けり。**

「どうして、貴方は出てこられましたか」

と。映画やなんかで脱獄囚というのがあるね。けれどもペテロの脱獄は、はるかに素晴らしい。みたまの力でなされた。

初代のキリスト者の中には、火刑に処せられようとした殉教者が天を仰いで祈ったら、沛然（はいぜん）として雨が降ってきて、火が消えたという例もあった。マルチン・ルターの先駆者であるボヘミヤのヨハネス・フス、彼はすばらしい使徒的信仰の人物であった。彼は火刑に処せられたが、ひとつも苦しい顔をしない。ニコニコして讃美歌を歌いながら、火にうち勝った。

●変質変貌

私たちは、生易（なまやさ）しい信仰では現実に勝てません。キリストの生命が私たちの中に本当に生きていると、もうパウロが言っている通りなのです。救われた時に、

「私はもう死んでいる。新しい生涯に入った。もう自分は死んだ自分である」

ということで、本当の生命があるわけです。私は「無」ということを言うが、その中には「死」という概念も入っています。即ち、

「人新たに生れずば」

とキリストがおっしゃった。それが即ち、

「この天来の霊を受けずんば」

ということ。受けたら、今までにいろいろなマイナス、欠点、弱さ等々が、今度は変質して神中心に動き出す。

パウロがまさにそうだった。彼は自己を誇りたくてしょうがない人間だった――ダンテもそうだから、煉獄を歩くときは重いものを背負わされて低くされて、低姿勢で歩かされた――それが今度はキリスト中心に回転をはじめたから、パウロの生まれつきの強さが別の質の強さに変った。全然自分が無くなってしまっているような姿に。だから、迫害する者のために祈る。敵をも本当に救いあげてしまう。

いただいたものは全部別な、キリスト中心へと、全部自分もろとも投げかけてしまえば、道が開ける。それを、

「この性格は自分が矯めなければ、克己修養しなければならない」とやっていたのでは苦しくなって、くたびれてしまうだけだ。

変質変貌という天来の現象が起きることが要です。変質変貌して神のものとされて、輝いてくる。そして、

「自分はどうもこういう方面が欠けてます。神様、どうかよろしくお願いします」とお願い（祈り）すれば、そっちの方だって強くされてゆくでしょう。人間が考えているような業じゃないですよ、神様がなさる業は。いいですか。ルターが『ロマ書序文』（１５２２年）の中で、

「まことの信仰は神の業であって、旧きアダムを殺して人を新しくし、心においても、情においても、思念においても、その他の諸力においても、我々を全く別な人間となし、そして聖霊をもたらすものである」

と言った。その通りです。しかも、

「善い事をしようなどと思わないうちに、善い事をなしてしまっている」

と更に書いてある。「信仰のみ」と言っているルターが、信行一如の事態をそこに現わしている。信即行です。信こそ最もはげしい神の業の行なのです。「神の業」（Gottes Werk）なんです。

どうぞ、皆さん、新人類に、第三の人になってください。第二の宗教改革は、あなた方一人びとりがやるのです。これをあなた方一人びとりがやらないでは、ノストラダムスの予言のように１９９９年に滅びが来るかも知れませんよ。予言のとおりにならないと誰か言い得ようか。しかしながら、どのような火の現実をも突破してゆけるのは、霊の民である。21世紀が来たとき、その中心をこの残れる民が背負わなくてはならない。

●本願の力

イザヤ書43章に、

「懼るるなかれ、我れ汝を贖えり、我れ汝の名を呼べり、汝はわが有なり。

と、たたみかけて神様は私たちをつかまえ給う。

「贖うから、来い！」

じゃない。

「もう贖ったから、来なさい！　もう十字架で贖ったから」

と言うのです。

「お前を呼んだ。お前はわたしのものだ」

という。

汝、水の中を過ぐるとき、我はともに在らん。河の中を過ぐるときは、水、汝の上にあふれじ。汝、火の中をゆくとき、焼かるることなく、火焔もまた燃えつかじ。

聖霊の火焔は燃えつきます。けれども、そこらの火焔は燃えつかない。

我はエホバ、汝の神、イスラエルの聖者、汝の救主なり」（イザヤ43・1～3）

と。このようにたたみかけて、本願の劫力の言が臨んでくる。預言者は上からの言を、上からの業を伝えている。詩篇はそれに応じて、こちらから祈りかかっている。本当は、預言者の言の方が土台なんです。もちろん、詩篇の中にも預言者の言は、しばしば響いています。

使徒行伝12章にもどります。

17 **かれ手をうごかして人々を鎮め、主の己を獄より導きいだし給いしことを**
つぶさに語り『これをヤコブと兄弟たちとに告げよ』と言いて他の処に出で
往けり。 18 **夜明になりて、ペテロは如何にせしとて兵卒の中の騒ぎひとかた**
ならず。 19 **ヘロデこれを求むれども見出さず、遂に守卒をただして死罪を命じ、**
而してユダヤよりカイザリヤに下りて留まれり。

とまぁ、えらい騒ぎとなった。何と不思議なことが起きたか！　キリストも十字架にかかる前は、人々がつかまえようとしてもつかまらなかった。

20 **さて、ヘロデ、ツロとシドンの人々を甚く怒りたれば、其の民ども心を**
一つにして彼の許にいたり、王の内侍の臣ブラストに取り入りて和諧を求む。
かれらの地方は王の国より食品を得るに因りてなり。 21 **ヘロデ定めたる日に**
及びて王の服を著け高座に坐して言を宣べたれば、 22 **集民よばわりて『これ**
神の声なり、人の声にあらず』と言う。

とんでもない。「これサタンの声なり」と本当は言わなくては。サタンの声を神の声と思っている。とんでもない。これは瀆し言である。瀆し言だから、聖霊に逆らっているから、

23 **ヘロデ神に栄光を帰せぬに因りて、主の使たちどころに彼を撃ちたれば、**
虫に噛まれて息絶えたり。

完全にペテロの勝利です。福音の勝利です。みたまの戦の勝利です。

●「主の使」となる

私たちは「主の使」そのものにならなくては。旧約に「マラキ書」というのがある。あれは、

「エホバの使」

という意味ですが――「マラキ」は固有名詞ではない――私たち自身が本当に「主の使」となって、みたまにあって、不思議なことが私たちを通してなされてゆく。即ち、証し人、主の証人は主の使なのです。主の僕、主の婢女となって、

「汝のみこころを、どうぞ、この私を通して成させたまえ。私をあなたの手足となしてお使いください！」

というときに、手足もまた口も、全部これ「主の使」として、私たちは地上の生涯を歩い

てゆく。主の使たるところの自覚、ペテロに力を与えたように、いろんな事態に対して神の、キリストの不思議な力をあらわして、生きつまりを知らず、

「為（せ）ん方尽くれども絶対に希望（のぞみ）を失わず」

と。それどころか、

「根源現実を失わず」

であるから、行きつまりを知らない。人に何と思われようと、何と取り扱われようと――ちょうど空気みたいに、水みたいに――楽に受けとって相手を包んでしまう。また、その器からあふれ出てしまう。同じ次元で戦おうなんていうのは、バカな話なんですよ。次元の違ったもの、質の違ったものになってゆく。もう戦いは本当の勝利なんです。

どの道においてもそうです。勉強しても、本を読んでも、創造的なことが湧いてきて仕方がない。万言万巻極まるところは聖書一巻となり、そして、なお極まるところは、私たち自身が即ち生ける

「キリストの書（ふみ）」

となる。天国へは、聖書さえも持って行くわけにはいかない。無手でいかなければならない。無的実存に聖書が化身する。持ってゆくものは、聖書一巻たる自分自身！

こういう事態にみたまがさせる。そこから無尽蔵なものが湧いてくる。ふだん本ものをいただいていると、何が来てもうろたえなくなる。だから、普段が大切なのです。いつの時でも神さまは、キリストは来たり給う。

「目を覚ましおれ！　霊の目を覚ましていろ！」

と。霊の目を覚ましているどころではない。

「霊の身体（からだ）をいつも鍛えていろ。鍛えられていろ」

と。神さまは愛する者を鍛え給う。

●一日千年

ペテロ書簡を開きます。ペテロ後書3章8節、

「愛する者よ、なんじら此の一事を忘るな。主の御前には一日は千年のごとく、千年は一日のごとし」（ペテロ後3・8）

私は著作集の最後に『一日千年』というのを書きますけれども。〔後に第十巻『聖書は大ドラマである』（1988年刊）に変更〕。

「一日は千年のごとく、千年は一日のごとし」

と。私たちは、天国的な三日間をここでいただきました。三日は三千年のごとし、人類の歴史のごとし。愉快な言葉だね、「一日は千年のごとく、千年は一日のごとし」とは。千年とは「永遠」のことだよ。

「一日は永遠のごとく、永遠は一日のごとし」

と。「今」において「永遠」をつかむ。

「いつぶっ仆れても、アーメン、ハレルヤ！のほかなし」

ということ。ブラウニングは辞世の詩で、

「私がもし、（天国へ）逝ったら、君たちは歓呼の声をあげて、私を送ってくれ。前進してやまざるものだ。地上の生涯は序曲にすぎない」

と言った。本当にそうですよ。地上は序曲の「序」の字にもあたらないかも知れない。それだけの気宇をもって、生きてる青年が幾人いるんですか。この福音に接っした青年諸君は、本当にそうであってくださいよ。神さまは愛惜してやまないのだから、君たちを！

「ボヤボヤしていられるか。今に見てろ！」

と、それだけの気合をもって進んでください。

雛鳥は鷲に育ってほしい。イザヤ書40章に、

「鷲（わし）のごとく翼をはりてのぼらん。走れども疲れず、歩めども倦（う）まざるべし」

とあるように、天翔（あまがけ）るものになってもらいたい。

●終末的実存

「一日は千年のごとく、千年は一日のごとし。主その約束を果たすに遅きは、或人（あるひと）の遅しと思うが如きにあらず、ただ一人の亡ぶるをも望み給わず、凡ての人の悔改（くいあらため）に至らんことを望みて汝らを永く忍び給うなり」（ペテロ後3・8～9）

本当は、

「神の国はすぐにも来る」

ことをキリストは望んでおられたけれども、神さまは、

「ちょっと待て」

と。もう二千年待った。もう危ない。だけれども、まだ救いたいのがいっぱいある。

「一人の亡ぶることも望み給わず、凡ての人の、万人の改心せんことを望みて、汝らを永く忍び給うなり」

という。黙示録の6章で、

「いつまで、貴神（あなた）は私たちの血の復讐をしてくださらないのですか」（黙6・10）

といって訴えているところがある。

「もう少し待て、数の満つるまで待て」

と。我々の人生はただ百年じゃない。神の歴史の一環を承りながら、神の歴史の大きな終末の時を明日（あした）にも望みながら居る。そういうものすごい、現在・過去・未来を掌握しているような、また、地獄・煉獄・天国を自在にもっているような、まさにダンテの言うような、

そういうのがクリスチャンの生涯なんです。百年が生涯じゃないのです。

「されど主の日は盗人のごとく来らん。その日には天とどろきて去り、もろもろの天体は焼け崩れ、地とその中にあるわざとは焼け尽きん」（ペテロ後3・10）

もうこんなサタンの跋扈した、傍若無神の、自己中心の、勝手主義の、民主主義の世界なんていうのは、ひっくり返ってしまう。もう情けないね、日本という国は。本当にダメですよ、この福音が本当に浸透しなければ、もの凄い勢いで！　数を言っているんじゃないけれども。

「だんだんこの地上は天国に化してゆく」

とは、聖書には書いてない。えらいことになる。けれども、そうであるがゆえにこそ、

「いよいよやれ」

という。マルチン・ルターが、

「もし、あしたこの世界が滅びるといったときにも、私はりんごの苗を植える」

と言ったように、望みなきところに本当のあり方、歩き方をするのが世界を救う、神の国を来たらせる実存です。いわゆるユートピアを夢見て何もしないようなのはダメだ。待つということは、血涙的実存そのものをもって、待つことです。どれが本ものかということはわかるです、自分で体験してみれば。体現するのです。「聖意体現」とはそのことです。

「聖意の天に成っているごとく、地にも成らせ給え！」

と。

「地にも、この私たちを通して成らせてください。いくらひっくり返ってもいい。貴神は、この空しきが如くにみえる私たちの業を決して空しくはなさいません」

という祈り。人間の計算のごとくに成っていくのではない。キリストの伝道は地上では失敗ですよ。たった三、四人しか本当の弟子はできなかった。けれども、この三、四人が本ものだったから、世界を動かして行った。

「小さき群よ、恐るな、神の国を汝らに与う。汝らを通して展開してゆくぞ」

とのキリストの言です。このキリストのみ言によってたましいが燃えたかな？　くすぶっていちゃダメだよ。

「かく此等のものはみな崩るべければ

崩れることは必然であるから、

汝らいかに潔き行状と敬虔とをもて、神の日の来るを待ち、これを速やかにせんことを勉むべきにあらずや」（ペテロ後3・11～12）

然り、アーメンです。

「地上は滅びゆくから、いよいよ本ものであれよ」

ということです。

「滅びゆくから、もういい加減であきらめよ」じゃないんです。

●献身

「結果は、願いとはおよそ反対のことになってゆくから、いよいよやれ！」ということ。全く逆説的な考えであり、ものの言い方です。ここに本当の神的実存がある。利害打算を計算してやっているような、この世の経済的な観念とは、およそ違う。

「地上ではマイナスを背負え、地上で背負ったマイナスは全部、天上でプラスとなるぞ！」

と。『無者キリスト』で書いたでしょ。レプタ二枚しかもたない寡婦がそれを全部捧げた。即ち自分を投げ棄てたあの賽銭。キリストは弟子たちに、

「あれを見ろ、あれが一番本当に投げ棄てたのだ」

と言った。あの寡婦こそ、キリストの一番の弟子であった。惜しんでいるうちはダメです。神さまのためには何事も、本当に何事をするのもこれ「献身」なのです。身を献げる、身を投ずる。そういう魂が本当の祈りの世界に入れる。そうして、力が来てしょうがない。

「その日には天燃え崩れ、もろもろの天体焼け溶けん。されど我らは神の約束によりて、〔キリストの〕義の住むところの新しき天と新しき地とを待つ」（ペテロ後3・12～13）

のである。天地を貫くこの義、

「わが神、わが神、何ぞ我を棄て給いし！」

といったあの叫び声における神の義。義と愛とは、その境地ではクロスの形で組んでいる。聖意の成っている事態が義なんですから。いわゆる正義じゃない。己を棄ててかかっているところに本当の義がある。

「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、主なる汝の神を愛すべし」（マルコ12・30）

とは何ですか。

「全身を神の中に投げ入れろ」

ということ。そうしたら、神の愛は流れてやまない。投げ入れるその姿は義なんです。内容は愛なんです。愛は必ず横に流れる。だから、義愛一如です。

もうひとつ、ペテロ前書の4章12～14節、

「愛する者よ、汝らを試みんとて来れる火のごとき試練を異なる事として怪しまず、反ってキリストの苦難に与れば、与るほど喜べ、なんじら彼の栄光の顕われん時にも喜び楽しまん為なり。もし汝らキリストの名のために謗られなば幸福なり。

この「名のために」は、「名に在って」というのが本当の意味です。

栄光の御霊すなわち神の御霊なんじらの上に留まり給えばなり」（ペテロ前4・12～14）

これは私の大好きな句です。

「キリストの名に在って」

とは、キリストと一如の事態を意味します。

「みんなに嫌われ、誤解され、除け者にされ、無視されても、結構です。かえってキリストの苦難にあずかればあずかるほど嬉しくなりますよ」

というのです、「喜べ！」とは。

「十字架を負いて我にきたれ」

とキリストは言われた。「負わざるを得ず」ということ。

「おのが十字架を負わざる者は我が弟子でない」

と言われた。キリストの弟子、キリストの僕、キリストの無者、これが私の悲願霊願です。苦難を負えば負うほど、なぜ喜べるのですか？　力が来るからです。それを負うことのできる力がくるから、楽しくてしょうがない。ベートーベンも、

"Durch Leiden（ドゥルツヒ ライデン） Freude!"（フロイデ）

「苦難を通して歓喜へ！」

といった。もう聾で彼は絶望して、ハイリゲン・シュタットで遺言状を書いた。ドナウ河に身を投じようと思った。ところが、思い止（とど）まって、

「この音楽は、悩める者、苦しめる者、悲しめる者のために、私はこれからやる」

と。それから、もう肉の耳では聞こえない彼は霊の耳で聴いている。どんな「第九シンフォニー」の演奏も、ベートーベンが霊の耳で聴いた第九シンフォニーにはかなわないでしょう。私は泣きたくなるね。自分の作曲を、楽器では聞こえないが霊の耳で聴けているからこそ、あれだけのものが書けるのです。

失明のためミルトンは自分の手では書けない。それで、自分の娘さんたちに口授して、あの『パラダイス・ロスト』（「楽園喪失」）という驚くべき詩を書いた。

両腕のない獨協大学英文科の学生がいた。これは9歳の時に、戦争のあとでまだ世の中がゴタゴタしていたとき、電柱にのぼった。ところが、高圧線が走っていた。それに触れて転落した。もう少し置いておけば死んでしまうところだった。救急病院に運ばれて、腕の付け根より切断するほかなかった。両腕とも切断した。この男が学生時代にサッカーの選手として活躍していた。ものすごい気魄の青年です。しかし気持は謙虚なんです。サッカーは手を使わないけれど、腕がなくてはそんなに走れるものではないはずなのに。驚くべき気力だ。授業では口にペンをくわえてノートをとる。答案も口で書く。やりとげて卒業しました。この間、国際医学界という会合があって、そこで何か話すようにということで、

その青年がしゃべるので、私は出掛けて行った。話を聞いた。非常に感銘しました。

「自分は他人の助けをできるだけいただかないでやってます」

という。心ある女性と結婚しました。彼は絵に精進した。今、身体障害者の絵のうちでは世界的に第一級の絵を画く。私はその油絵を見たが実に力がある。私は自分の本（『無者キリスト』）を贈った。私のことを覚えてくれていて、

「先生、本当に有難うございました。力づけられました」

という。だから、どのようなことでも本当に神の霊にふれたら不可能なことはない。ナポレオンが「不可能」という字を自分の字引から抹殺したというが、さすがにナポレオンだ。しかし、彼はとうとう戦争では、英雄の末路となった。けれども、セントヘレナで彼は最後に福音書を開いて読んで驚いた。

「これは本じゃなかった。これは生ける文字、生き物だ、キリストの言葉は。参りました！」

と彼は書いている。最後にナポレオンはキリストの前に頭を下げた。十字架の死に至るまで従順であったキリストが本当の英雄である。英雄などという言葉では言いたくない。

私たちは本当に自分を投げすてた

「無者」

となると、

「無即無限無量者」

だから、もう行きつまりを知らないことになる。どうぞ、皆さん、やってくださいよ。私は、

「私の人生はこれからだ。使命を果たし終えるまでは、神様は私を支えてくださる」

と信じて行きます。ただ、御名のゆえ、御名に在ってです。皆さんも同じことです。いわゆる人間的な、この世的な幸福というものは問題じゃないですよ。本当のさいわいとは、キリストをもつこと、みたまをもつこと。これ以上のさいわいはない。

「**恵福（さいわい）なるかな、霊の貧しき者、我（キリスト）汝のうちにあり**」

という。これが本当の恵福（さいわい）である。山上の垂訓は私たちの人生の本当のところを、第一言でもって語ってくださった。だから、

「**苦難にあずかればあずかるほど、嬉しくてたまらん**」

と、パウロやペテロが告白しました。パウロは獄中でピリピ書簡を書いて、

「**喜べ、喜べ！**」

と言っている。エペソ書もコロサイ書ものすごいですよ。

「**汝らキリストの名に在ってそしられなば幸福（さいわい）なり**」

と。マタイ伝では、

「**義のために責められたる者はさいわいなり。預言者たちもそうであった**」（マタイ5・11～12）

と。この罪の世にあって、戦いがなかったら、それはうそですよ。本当に生きてない証拠だ。

しかし、その戦いは、敵を倒すための戦いではなく、敵をも救いあげるための戦いである。この戦いは福音でなければできない、みたまの福音でなくては。

「**栄光の御霊（みたま）、神の御霊、汝らのうちにとどまり給えばなり**」

という。

●天地一如

キリストの弟子たちは、福音書における弟子たちは、躓いたり転んだりで本ものではなかった、どんなにキリストと一緒にいても。ところが、キリストが天界に往かれてからは、聖霊が来たら、彼らは地上におけるよりも、先生（キリスト）ともっと親しくなった。み霊に在って。パウロは、

「**肉によりてキリストを知るまじ**」

と言ったように、私たちも天上のキリストをいただき、使徒たちと同次元の世界に入って進む。天界の使徒たちが、

「お前たちと一緒に行くぞ」

と伴（つ）いてくれる。こういうキリストの弟子を友として、私たちは天地相呼応してゆくのです。祈りの世界は、そのような立体的構造をもっている。

神さまの現実は、アブラハム、イサク、ヤコブも、今もなお天界にいて生きている。使徒たちはもちろん。そういった活ける現実なのです、私たちが賜っている現実は。死を乗り越えて天界を地界としているわけです。みたまの世界は、

「死んでから、そういう世界がくるのを信じます」

といって、もったいぶって言っているようなことじゃない。「信」は終末を現実としているわけです。信即現と申すゆえんです。

このキリストが私たちの中に、みたまをもって生きてくださるから、これを現わさざるを得ない。人をこの歓喜の世界にひき入れざるを得ない。ペテロが言っているように、

「栄光の御霊、神の御霊が留まっているから、どんなことにでも遭えば遭うほど嬉しいではないか」

と。神さまを、キリストを顕わすことは、私たちの即生活、即讃美、即栄光の顕われということです。もう、あなた方がもっていた相対的問題は、みんなすっとんでいったでしょ。祈りは、キリストと一つになるところから祈ってください。自我でもって祈ったってダメです。まず、祈りなんかそっちのけで、棄てちゃって、キリストの中へとびこむ。そして、キリストの中に入ったら、そこから祈ってください。

そうしたら、今願おうとした願いの質が変わってくる。それは必ず成っているから。信とは、そのような現（うつつ）の世界です。嬉しいねぇ。具体的なことは、最も決定的な境地に入ると、逆に生かされてゆく。聴かれざる祈りは、それよりももっと聴かれた世界に入れる。

私はその意味で、親鸞の『歎異抄』が好きだね。親鸞は本当にそういう角度だ。一遍上人もそうだ。

「もう南無阿弥陀仏が一切になって、たまらない」

といった角度のことを告白している箇所がある。

「南無阿弥陀仏が南無阿弥陀仏を言っている。私が言っているんじゃないんだ」

と。「南無キリスト」は、ただこちらの願いではない。聖霊が執り成して、わがうちにて、

「南無キリスト！」

と言ってくださる。無量寿無量光の実存者キリストの中に祈入（帰入）してゆく。帰入（祈入）せしめられてゆく。即、現実である。

「この力を、この生命を、この光を如何せん！」

といって生かしめられてゆく。

聖書はまるでビデオのような書です。呻き叫んでいる。読むことは聞き入ること。聞くことは祈り入ること。そこに力が来る。だから、マルチン・ルターは、

「本当に祈ると、仕事はぐんぐん進んでゆく」

という。その通り。ルターにしても、カルヴィンにしても、あれだけの著作がどうしてできたのか。みんな、みたまの力です。

あなた方の仕事は、何であろうと、それにみ霊で打ち込むのが肝腎です。そうすると、生きた生涯そのものが最大の芸術品である。神さまは、そういった生きた芸術作品をあなた方を通して作らんとしていらっしゃる。

神は最大の芸術家です。私の『芸術のたましい』〔著作集第2巻、１９７６年刊〕はその角度から、ぶちまけて書いた。あんまり幅があるものだから、

「いったい、これ福音か？」

などといぶかる。神さまの最大の作品はイエス・キリスト、独り子です。だからもう、プロテスタントの、カトリックの、何のかんのではありません、イエス・キリストを本当に持ったら。キリストと直結、キリストと一如！　いよいよ立ち帰り、いよいよ一如となって前進する。「進め！　進め！」と。キリストは、

「我は、今日も、明日も、その次の日も進み往くなり。かの狐に言え」

などと言っている。私たちも，

「ハイッ、往きます！」

と応える。人間界にも狐や狸がたくさんいるからね。ああ、熾んなるかなこの福音！

もう言葉になりません。終ります。

（京都キリスト召団代表者、奥田昌道教授が録音テープから筆写したものに基づいてまとめました。小池）